

ニュースレター

いりおもての森から

林野庁 九州森林管理局
西表森林環境保全ふれあいセンター
平成20年3月発行 NO:12号



イジュ

森林生態系同好会（FEC）の八重山植物観察会を支援

3月9日(日)から12日(水)にかけて、森林生態系同好会(FEC)一行29名が八重山諸島の自然観察会に来島しました。

当ふれあいセンターでは、10日の西表島テドゥ山自然観察、11日の西表島仲間川自然観察・石垣島自然観察及び12日の石垣島自然観察に同行し、植物探索等の支援を実施しました。

参加者は、3日間とも雨にも関わらずマングローブ林から照葉樹林への移り変わる西表島テドゥ山の原生自然植生に目を輝かせ、西表島仲間川ではサキシマスオウノキの大きさに感動し、



マングローブ林の自然観察

石垣島ネバル御嶽の海岸熱帯照葉樹林の見事な原生林に畏敬の念を感じながら説明にメモを取るなど、自然を満喫する自然観察会となりました。

3日間の盛りだくさんの自然観察会に、1人の落後者も無く熱心な観察となりました。



テドゥ山自然観察



ネバル御嶽の林相

サモア国・環境保全局長、森林局長が西表島における環境の保全と利用について視察（JICA）

2月1日(金)、サモア国の環境保全局長及び森林局長が、西表島における自然保護、レクリエーション利用のあり方等の研修で当センターを来訪されました。

当センターの職員が、西表島の森林生態系保護地域、保安林、自然休養林等について概要を説明し、質疑を受けました。

翌日は、西表島西部の船浦港で自然休養林としてのヒナイ川周辺国有林の保全と利用のあり方、東部の仲間川でマングローブ林と巨樹サキシマスオウノキなどの保全活動の実態について説明しました。

また、環境省野生生物保護センターでイリオモテヤマネコの保護活動、林木育種センター西表熱帯林育種技術園で林木の育種について、担当者が説明しました。

西表島での研修は、時間の制約と雨中という条件下ではありましたが、熱心な聴講と、多岐にわたる質問があるなど要請に応えることができました。



石垣少年自然の家まつり”を支援

3月2日(日)、石垣少年自然の家が開催した「石垣少年自然の家まつり」を支援しました。八重山諸島では毎日雨模様の天気が続いていましたが、当日は最高の天気にも恵まれ多くの家族連れ(約900名)が訪れ、大いに盛り上がりました。



紙トンボの作成

ふれあいセンターでは、缶ビールケースを再利用した紙トンボ作りとエゴノキを輪切りにした材料でペンダント作りを行い、子供たちへの技術指導及び実演を行いました。

多くの家族連れが順番待ちで、準備した200組の材料も祭りの終了時間を待たずに無くなるなど、昼食もままならない盛況となりました。



エゴノキを利用したペンダントの作成

ギンネム抑制試験地の準備作業を実施

2月25日(月)、ギンネム抑制試験地の準備作業を実施しました。

当日の天候は曇り、西表にしては気温18度で最高の作業日和となりました。もう2、3度気温が高いと作業どころではない暑さとなります。

試験調査は、海岸防潮林の現存植生の中に侵入したギンネムを除去し、自然に近い植生状態に復元することを目標にしています。



アダンなどが繁茂する中でのギンネム除去作業

平成19年度「自然環境教育推進のための連絡会」開催

2月5日(火)西表島における自然環境教育推進のための連絡会を上原地区多目的集会施設において開催しました。

西表島内の小中学校と支援可能な機関・団体を集めて、平成19年度の連絡会を開催しました。連絡会は、今年度も年度末を迎え小中学校においては次年度の教育カリキュラムも検討される時期となることから、連絡会員相互の情報交換などを行ったものです。

会議では、各小中学校における自然環境教育への取り組み及び今後の計画などが紹介されました。

また、昨年2月に当センターが作成した「西表島での自然環境教育カリキュラム」の活用について積極的な意見交換が行われました。



「自然観教育推進のための連絡会」

とは、西表島内の小中学校と支援可能な機関・団体が、自然環境教育に関する情報や意見の交換、連絡調整を行い、自然環境教育を推進して行くことを目的に平成16年度に設置した連絡会です。

最後に、連絡会を毎年開催すること並びに実践事例集を作成することを申し合わせて会議を終了しました。連絡会会員の皆様、今後ともご協力よろしくお願いいたします。

平成20年3月のニッパヤシモニタリング調査を実施

3月4日(火)及び5日(水)、ニッパヤシモニタリング調査を実施しました。

今期の調査は、1年に1回のニッパヤシ周辺植生であるオヒルギ等の調査も加え、多くの調査項目となりました。

初日は、葉数・葉高調査及び周辺植生調査、そして翌日は周辺植生調査に続き開空度調査を実施しました。両日とも天候に恵まれ、順調に調査が終了しました。



タガヤサン等導入外来種調査

先陣が南洋樹種の導入を目的に試験地として植栽したものの、そのまま放置されている試験地が浦内川上流のマリュドゥの滝近くに存在することを知りました。

そこで、その一部で生育が確認されている、タガヤサン、タイワックスノキ、タイワフウの実態について、林分の現在状況を把握するために、2月19日(火)に調査を実施しましたのでその結果を報告します。

南洋樹種導入試験地は、九州から南方約1,000kmの洋上に位置する西表島中央部から西北に流下する浦内川の中流部に位置する西表国有林108林班い、ろ小班で、浦内川河口から約7kmのマリュドゥの滝展望台から見下ろす谷に位置しています。

周辺植生は、亜熱帯の照葉樹林で、高木層にオキナワウラジロガシ、オキナワジイ等、中木層にエゴノキ、アオバノキ等、低木層にモクタチバナ、シシアクチ等が出現します。

調査方法は、単木測定のためタガヤサンを除き、標準地としては相応しくないものの生育良好な場所を囲む10m×10mのコドラートを設け、径級、樹高の調査を行いました。



良好な生長を示しているタガヤサン

① タガヤサン

径級は概ね良好な生育を示していると思われるが、樹高は台風などの影響により梢端部の枝葉が飛ばされ上長成長は良くありませんでした。

② タイワックスノキ

径級及び樹高とも相応の生育をしているものと思われます。

このことから、通常の人工造林としての施業を実施するならば、ha当たり材積は500m³程度の人工林造成が可能であるものと思われます。

③ タイワフウ

調査対象地のタイワフウは、台風などの影響で枝葉が吹き飛ばされ、生育状況は良くありません。

視観的に見ると上長生長・肥大生長とも順調に生育していると思われますが、近年の強い台風による影響を受け樹勢は低下しているものと思われます。

なお、調査地とは別のマリュドゥの滝上のタイワフウは、径級が57.5cm、樹高は20mと、良好な生育を示しているものもありました。



巨木になったタイワックスノキ

まとめ

調査対象樹種の3樹種とも単木の成長状況は、近年の強い台風の影響を排除すると良好な成長を示していました。

また、生育良好な部分もあることから、地理的、気象的な条件は適していると考えられ、一般的な施業を実施すれば用材林としての人工林の造成は可能であると思われます。

しかしながら、気象条件の1つである台風が今後とも強く、かつ大型化するものと予想されること及び搬出条件等を考慮すると、現実的には人工林施業については難しいものと思われます。

平成19年度ヒナイ川・西田川の利用状況調査（2月分）報告

平成20年2月期の利用状況調査を、ヒナイ川は21日（木）、西田川は22日（金）に、それぞれ実施しました。今年は正月より例年になく曇天、雨天の日が続いており、このような天気も影響してか、1月から少ない利用状況となっています。



増水したサンガラの滝
（西田川）

調査結果は、ヒナイ川では、カヌーツアーのみで、5組（20名（ガイド含む））でした。西田川もカヌーツアーのみで、2組（5名（ガイド含む））でした。3月からは気候も良くなり大勢のカヌー体験ツアーが訪れてくれるものと思われます。



熱心に説明するガイドさん
（ヒナイ川）

西表島の樹木

ヤエヤマヒルギ（八重山蛭木、八重山漂木）

学名：Rhizophora stylosa Griffith (Rhizophora mucronata)

ヒルギ科：Rhizophoraceae

ヤエヤマヒルギ属：Rhizophora Linnaeus

別名：オオバヒルギ（大葉蛭木、大葉漂木）、シロバナヒルギ（白花蛭木、白花漂木）



分布

東アフリカから南アジア、オセアニアの熱帯および一部の亜熱帯に広く分布する。日本では南西諸島（沖縄諸島・宮古島・八重山諸島）に分布する。分布の北限は沖縄本島である。

石垣島および西表島の干潟には大群落を形成し、八重山諸島のマングローブを代表する木である。

生態及び生育環境

感潮帯の、比較的海水に晒される干潟に生えるマングローブの構成種の一つ。他のヒルギ科植物と比較して塩分に対する耐性が強く、河口域のマングローブ湿地に生育し、オヒルギよりも海側に生育する。

形態

樹高は、8～10m程度となる常緑高木である。

葉は、厚い革質で滑らかな楕円形で、葉の先端にとがった突起があるのが特徴。

葉の裏側には無数の小さい黒点があり、葉の裏の主脈は半円形である。

根は、幹の根本近くから周囲に下部から斜め下に向かって出て、枝分かれしながら泥に入り込む多数の呼吸根を伸ばす。この呼吸根は、たこの足状になり支柱根と呼ばれる。

花は、花期が5～7月、花弁は白色の4枚で腋生の集散花序となる。この花の色から、別名シロバナヒルギと呼ばれることもある。萼片は4枚で先は裂けており形状は三角形となり、萼筒（果実）は褐色で大きい。

実は、長さ20～50cmある棍棒状の卵形で、萼片が付かないのが本種の特徴である。やがてその実の先端から長さ30cm以上にも及ぶ細長い褐色の胎生種子の根が伸びる。成熟した胎生種子は、他のマングローブ植物と同様に果実から抜け落ちて海流に乗って移動し、海流散布により分布を広げる。

なお、大きさは異なるが、同じ仲間のオヒルギ、メヒルギも同様の姿をしている。



葉と胎生種子



花

利用

樹皮を染料とする。また、材、木炭の原料となる。

林野庁 九州森林管理局 西表森林環境保全ふれあいセンター

〒907-0004 石垣市字登野城55-4 石垣地方合同庁舎内

TEL:0980-88-0747 FAX:0980-83-7108 URL: <http://www.kyusyu.kokuyurin.go.jp/huresen/huresentop.htm>